護国寺の創建と日秀上人

島　尻　勝太郎

はじめに　　2. 日秀上人と護国寺
1. 大安禅寺と護国寺　　結　び

はじめに

護国寺は、琉球真言宗の本山であり、臨済宗の円覚寺と共に、王府から最も重んぜられた寺院であるが、その創建については察度王代となっている。けれどもその創建についての記録はなく、ただ頼重法印が入寂した年にかけて、これを開山とすることが通説になっている。しかしこのことは大安禅寺の建立と関係して考察されるべきであろうと考える。この寺院と深い関係のあった日秀上人についても、その出自、経歴等について、今一人の日秀と混同されていると考える。本小稿は、これらのことについて考察することを目的とするものである。

1　大安禅寺と護国寺

(A) 護国寺創建年代についての疑問

護国寺の創建について記している史料は次の通りである。

(1) 『察度王御代、有建立哉、開山頼重法印者洪武１７年８月２１日入滅。惟恨、第二世以来数百年、無記楮、故不知其幾世矣』（琉球国由来記、波上山権現縁起序）

(2) 『（洪武１７年）八月２１日、護国寺開山住僧頼重法印入滅。蓋頼重乃日本人也。何年至国、以建寺于波上山、今不可考。然洪武１７年、頼重入滅、則乃朝之末、或明朝之初、其至国也無疑焉』（中山世譜）

これをうけて、球陽にも、『３５年(元カ)僧頼重法印入滅』の題で、ほぼ同様のことを記している。察度王３５年は１３８４年であり、この年に入滅した頼重法印を、

直ちに護国寺の開山とし、建寺の年代は不明としている。頼重来島の年も元明の際であろうとしている。この史料を本にして、沖縄一千年史は次のように記している。『察度王の時代に、我が本土の僧頼重法印という者渡来、波上山護国寺を開き、察度王の祈願寺とせり。渡来及び寺院建立の年月は伝はらざれども、元中元年8月21日に元寂せしこと明らかなれば、此の時は仏教の渡来より百余年を経過せしを知るべし。想うに頼重法印は薩州坊津なる龍厳寺一乗院（京都真言宗、大本山仁和寺末寺）より来りしものにあらざるか。……』

この一乗院の住持には、四代頼俊（１４０８）、五代頼憲（１４６９－８７）六代頼政（１５０４－２１）、七代頼全（１５２２）、八代頼忠（１５２８－３２）のように、頼字のつく住持が続いて住し、年代は１５世紀初から１６世紀初に及んでいる。特に第六世の頼政は、一乗院灌頂道場の建築に際し、１４７２年に琉球に勧化布教し、数年滞留して、多くの金銀珠玉を得て、造営の資にあて、１４７８年に竣工をみたといわれている。これによってみれば、坊津の一乗院と琉球との関係は深く、早くから往来があったと考えられる。従って、頼重が１４世紀末葉に一乗院から渡来したこともあり得たと考えられる。けれども直ちに護国寺の開山と考えてよいであろうか。護国寺は貞享５年（１６８８）には大乗院（鹿児島に建立された一乗院の末寺）の符牒をうけてその末寺となっていることが坊津博物館に殊る符牒によってわかるが、それ以前には及ぼすことは出来ないであろう。頼重はこのように一乗院と法系を同じくするものであったので、後世からさかのぼって護国寺開山第一祖とされたのではなかろうか。琉球国由来記（１７１３）の、護国寺住持次第には、開山を頼重とし、恨むらくは第二世以来数十年記楮無き故に、其の幾世なるかを知らず、と記されている。次には嘉靖以来の住持が書かれ頼玖和尚（嘉靖２７年戊申４０８日）以下、康熙５２年の覚遍に至るまで２３代を記している。頼重入滅の１３８４年から頼玖まで１６４年の空白の年代があるのである。このように頼重を開山とするなら、それかれ百年以上にも住持が不明であることがあろうか。それはその間、波上に護国寺が存在しなかったからではないだろうか。

（B）大安禅寺の創建

大安禅寺は、宣徳5年（１４３０）に柴山が来島した時、自費を以て建立したことが、その碑記に記されている。碑は早くから失われていて碑文記にもないが、蕭崇業の使録の芸文の項にのせられ、これが中山世譜や球陽にもとられていて、創建の事情を知ることが出来る。柴山は洪熙元年来島して尚巴志を冊封した正使で、その後4回も来島している。碑記の前文は次のように書かれている。

『…東夷之地、離閩南数萬余里、舟行累日、山岸無分、茫茫之際、蛟龍湧萬丈之波、巨鱗漲馮夷之水 、風濤上下、捲雪翻藍、險釁不可勝紀、天風一作煙霧、忽蒙潮瀾、洌洌波濤之聲 、振於宇宙、三軍心駭、呼仏號天、頃之忽有神光、大如星斗、高掛危檣之上、耿煥昭明、如有所慰、然後衆心皆喜、相率而言曰、此乃龍天之庇、神仏之光矣。何以至是哉、是咸頼我公、崇仏好善、忠孝仁徳之所致也。迨夫波濤一息、河漢昭明、則見南北之峰、遠相迎衛、迅風順渡、不崇朝而抵岸焉… 』

福建から琉球に至る渡海の困難さをのべ、舟人たちが仏をよび天に叫んで助を求めた時、星のような大きな光が檣の上にかかり、それから波が静かになって無事琉球につくことが出来た。これひとえに神仏の加護であるというので、大安禅寺を創建し、9蓮座の仏像をまつり、その恩に報いることにしたのであるというのである。

この大安禅寺はどこに建てられたか今では不明とされている(2)。南島風土記によれば、楊氏仲地親雲上家譜にある絵図によって、護国寺の隣りにある「海南之寺」とあるのがそれではないかという。「天尊堂及び護国寺の西に当り、4注の小宇上に宝珠を載せたるものを図し、海南之寺と註してあるが、柴山碑記に、「地を海岸の南に得といふものがこれに該当するように思われる。若し然りとせば、護国寺境内に小宇を営建して海南寺とも大安寺とも称したものではなかろうか。その寺退転して寺鐘護国寺に移管されしものかと考えられる」という。この考からすれば、護国寺も大安禅寺も併存していたことになる。楊氏家譜は現存するが、「上に宝珠を載せた4注の小宇」は独立した寺院とは考えられない。又、護国寺境内

でもなく遠く離れた寺院である。由来記の編纂された１７１３年には、大安禅寺は既に廃絶し、その跡さえもわからなくなっていたのである。

（C）大安禅寺の跡に護国寺建立

現在の護国寺のある一帯の地が、もとは海岸の岩山であり、木がしげっていたことは誰でも気付くことであろう。ここに寺院を建立するには、その岩山をけづり、土を盛り、その上に寺院建築がなされるのであるから、大きな土木工事であったに違いない。それをなしとげるには、王権によるか、或いはそれに近い権威と財力をもつ者でなければならないであろう。王府の記録にはそれらしい記事はみられない。柴山の大安禅寺碑記の後半にはそれが記されている。

『…既而奉公之暇、上擇岡陵、下相崖谷、願得龍盤虎拠之地、以為安奉仏光之所、庶幾以答扶危之恵。於是掬水聞香、得其地於海岸之南、山環水深、路転林密、四顧清芬、頗類雙林之景。遂闢山為地、引水為池、球之陾陾、築之登登、成百堵之室、闢四達之衢、中建九蓮座、命有道之僧、董臨其事 、内列花卉、外広椿松、遠呑山光、平挹灘瀬、使巣居穴処者、皆得以覩其光…』

大安禅寺を建立すべき地を海岸の南に得たが、そこは山めぐり水清く、路転じ林密に、四顧清芬で寺域として最も適当であった。遠く山光をのみ、平に灘瀬を挹するというのも、護国寺の地域に最も妥当しているようにみえる。更に「山をひらきて地となし、水をひきて池をつくり」「これを球すること陾陾。これを築くこと登登」は、土をもっこに入れて運び、山をくづして陾陾、登登として力を入れ、かけ声を発して労働に従事したことが示されているこれらの作業は、柴山の率いて来た人たちが主としてあてられたのであろう。千仏霊閣碑にも「遂に三軍地を墾し、基を営みて仏寺を建立す」と記している。このようにして宣徳６年（１４３１）には寺の建築が完成した。それから２５年後の景泰７年（１４５６）には、尚泰久王によって禅寺に巨鐘が寄捨されたのである。鐘銘[3]に『琉球国、王大世主、庚寅慶生、玆現法王身、量大慈願海、而新鋳洪鐘、以寄捨本州大安禅寺、上祝萬歳之宝位、下済三界之群生…』とあるのがそれであった。この鐘が、護国寺に残されたのは、大安禅寺が廃絶してその後に護国寺が建立されたからであろ

う。若し大安禅寺が他処にあったとしたら、それが廃絶に帰しても、寺跡名、地名として残された筈である。それが全くなく、伝承もないのは、大安禅寺が廃滅に帰し、その跡に、護国寺が建立されて数百年も経たからであろう。徐葆光の「中山伝記録」に「護国寺の旧名大安禅寺」とあるのは、南東風土記によれば、寺の鐘銘によって書かれたとしている。これより前由来記編さん時の１７１３年でも全く忘却されているのをみると、徐葆光来島時の１７１９年に、そのような伝承があったとは考えられない、これまでには、現在の護国寺の地には、柴山が山を切り開いて１４３０年に大安禅寺を建て、２５年後の景泰７年には巨鐘が寄捨された。この寺が廃絶して、その後に護国寺が建立されたことを述べた。それでは何時頃大安禅寺が廃絶し、又護国寺はいつ頃建立されたのであろうか、冊封使来島の時は、各地の寺院を遊観してその記録を残している。使録を残している最初の人は陳侃であるが、陳侃使録では、円覚寺の宏壮を記し、小寺は教えるに暇がないとしていて、その他については記していない。大安禅寺建立以後百年を経過しているので、既に廃絶していたのではなかろうか。日秀の来島した頃（16世初頃）であるが[4]、三国名勝図会には次の記事がある。

「㊦是ニ於テ上人ヲ引見シテ曰、寡人願ハクハ和尚ヲ長ク吾国ニ留メ萬民ヲ教化セント、上人居住ノ勝地ヲ覓ム。浪上権現祠ノ畔ニ、海ニ臨ンテ過ギガタシ上人草慮ヲ茲ニ結ンデ住ス。」その頃、既に大安禅寺もなく、又護国寺も建立されてなく、権現祠があるだけであったと考えられる。１６０３年来島の袋中上人の琉球神道記には、波上権現護国寺の項があるが、権現について記すのが中心となっている。冊封使録に護国寺のことが記されるのは１７世紀以後である。尚豊の冊封使杜三策（１６３３年来島）の従客胡靖は「杜天使冊封琉球真記奇観」を残している。これには、「景色の最も美しいのは輔国寺である。ここを降りて東すれば大明街（久米村）」と書いていて、護国寺を輔国寺としている。尚質の冊封使張学礼（１６６３年来島）は、報国寺と書き、天使館と同じように週圍寛広であると述べている。１６８３年来島の汪楫は、やや詳しく述べている。「波上は俗に海山寺と呼ぶ。国人はただ波上と称す。其巓に小板閣三楹が離れて立つ

ていて、中に阿弥陀、左に薬師、右に観音がまつられている。銅片牖があって、その背に元和二年壬戌（１６１６）の六字をほってある。この下におりると護国寺で、又三光院と名付け、不動尊がまつってある。」と。１６世紀までに大安禅寺が廃絶し、護国寺が建立されたことがほぼわかるようである。

(D) 琉球国図中の護国寺

県立博物館に「琉球国図」という古地図がある。熊本伊右衛門入道円斉71才書写、奉納天満宮広前、元禄９丙子１８日吉辰、と書かれている。この地図は申叔舟の海東諸国起所収の「琉球国之図」と同性質のものであるが、この「琉球国之図」は、道安の「日本及び琉球国図」を基礎にして作られたものと考えられている。道安は琉球国の名によって屢屢朝鮮と往来したことは、李朝実録に記されていて周知のことである。県立博物館所蔵の琉球国図には、王城の北にあたって浦添城（浦傍城と書かれている）があって、その西にあたって護国寺と記されている。海東諸国記の浦添城も浦傍城と書かれ、同一の地図を基礎にかかれたと考えられるが、護国寺は書いてない、若し察度王が護国寺を創建したとすれば、場所は波上でなく、浦添の王城の近くに建寺するのが妥当であろう。そのして、この琉球国図が道安によって書かれそれには護国寺の記入もあったもので、それが元禄９年に熊本伊右衛門入道円斉によって書写されて、天満宮に奉納されたものであるなら、護国寺創建の年代を考えるのに、最も重要な資料である。波上の地には先に大安禅寺があり、これが廃絶に帰してから護国寺が建立されたことを考えてきたが、これはその考を強化することになる。護国寺は通説のように察度王代に創建されたが、それは浦添であって、後に波上に移建されたということになるのであろう。

２　日秀上人と護国寺

(A) ４人の日秀

日本仏教史の上で、日秀[(5)]という名の僧が４名いる。（１）の日秀は１２６５～１３３４年の人で、上野の人、高橋入道時忠の子、日蓮門下１８中老僧の一人と

いわれている。⑵の日秀は１３８３～１４５０で近衛家の出とされ、玉洞妙院と号し、字は観随、本満寺の開山、以上２人はいづれも日蓮宗である。⑶は、續日本高僧伝に記されている日秀、⑷は、三国名勝図会や南聘紀考に記されている日秀の４人である。⑶の日秀と⑷の日秀は、沖縄の史家がこれまで同一人と考え、その記述に矛盾と錯誤がみられた。球陽、琉球国由来記、中山伝信録等に記されている日秀は、三国名勝図会、南聘紀考に記されている日秀であり、沖縄に多くの遺蹟を残し、後に薩摩に渡って日当山で入定した僧である。この⑶と⑷の日秀を同一人として記述した最初は、沖縄一千年史（真境名）で、これを沖縄仏教史（名幸）もうけついでいる。

（B）南聘紀考の日秀伝

南聘[6]紀考は伊地知季安（潜穏）の著である。伊地知季安は文化朋党事件で喜界島遠島を命ぜられ、文化８年に赦免されても３６年も仕途につくことが許されなかった。その後記録方添役薬園奉行勤、軍役方取調掛、記録奉行、使番鉄炮奉行、町奉行格等を経、慶応３年８月に８６才で歿した人である。その著作の中、「旧記雑録」は最も名高く、薩藩史研究の基本史料とされている。その外に「漢学紀源５巻」「西藩田租考二巻」「近秘野草１巻」「薩州唐物来由考」「南聘紀考３巻」がある。南聘紀考は、天保初年の成稿とされ、古史にあらわれた琉球、南島中国との交通紀事、薩摩と琉球、琉球と中国との関係を、漢文で編年体に記したもので、これ又薩琉関係研究にとって基本的な史料である。この中で日秀の伝記が、永禄１２年（１５６９）の条に記されている。

『前比日本上野僧日秀、既巡６０余州、遠航住富蔵河千手院、年歳屢豊、民為之謡曰、神人来夸、富蔵水清、神人遊今、白沙化米、後住波上３年、復回北山事見史略、年紀不詳、然是年１１月大中公命日秀建供養石、拠此応在此頃矣。後７年天正３年１２月８日入定于日当山三光院』

日秀は上野の僧で、６０余州を巡って後、金武富蔵浜の千手院に住んだ。豊年が続いたので、庶民は、神人来る、富蔵の水清し、神人遊ぶ、白沙米と化すと謡った。波上に３年住んだが後に北山に帰った。１５６９年に薩摩の貴久は、日秀

に供養石を建てるのを命じているので、日秀はこの頃の人であろう。天正３年（１５７５）の１２月８日に、日当山三光院で入定したという。中山伝信録は、１７１９年に来島した徐葆光（尚敬冊封副使）によって書かれたが、それには、（富藏川）は「金武山にあり。山上は金峯となす。山下に洞あり、千手院あり、富藏川あり、二百年前日秀上人ありて、海に泛び此に到る。時に年大豊、民謡いて云く、神人来る。云云」と書いている。この神人来るの謡は、何によって書かれたか不明であるが、南聘紀考の記事は中山伝信録によって書かれたのであろう。

（C）続日本高僧伝の日秀

続日本高僧伝巻第二に、「紀州智積院沙門日秀伝」があり次のように記している。

『釈日秀、字玄紹、不知何許人也。賦性豪爽有大志、自駆烏年、好学勤苦。義解渙発。超軼夷倫、自少壮所聽一々鈔録。大日經疏、釈論等鈔記、積為部帙、学者為珍、伝写行之。不惑之年、遊南京。兼学華厳三論倶舎唯識。及精因明論。弘治２年、董智積法席、入院之日、挙示六大法身大義。自後智積妙音両院、凡新命開法之日、必啓六大法身講席者、自秀始也。３年丁巳、登醍醐山、謁源雅大僧正、探報恩秘頤。秀巳為一法主。而求法志深、僧正特重之、授法流蘊奥。天正５年仲冬１２月、安詳而化。享年８３坐夏若干、』

日秀は紀州真言宗智積院の住僧で、字は玄紹である。駆烏の年（７才から１３才迄）から勤学し、又少壮の頃から聴くところを鈔録し、大日経疏釈論等を鈔記したものがつもって部帙をなすに至った。学者はこの鈔記を大いに珍重して伝唱したという。不惑の年には南京に遊学し、華厳、三論、倶舎唯識を兼学し、因明論にも精しかった。１５５６年には知識の法席を監督し、その翌年には醍醐山に登って源雅大僧正に謁した。僧正は日秀が求法の志の深いのをみこれを重んじて法流の蘊奥を授けた。天正５年１２月に示寂、年は８３才であった。沖縄一千年史は、これをうけて、

「按ずるに、示寂の年、南聘紀考とは２ケ年の差あれども、倘し天正５年に、８３才にて遷化せしとすれば、明応３年の誕生にて、沖縄の護国寺に在りし時

は、正に３０才前になりしなるべし。又不惑の年に南京に遊びしとすれば、沖縄を経て渡航せりや。或は帰帆の後、坊之津等より出帆せしやは明ならざれども、紀州の真言宗の智積院より沖縄の真言宗の古刹護国寺に留錫せしことは略想像し得らる」とし、智積院は新義真言宗であるので、古義真言宗の護国寺に、法式が多く新義派に法っているのもその為であろうと言っている。

この「不惑の年に南京に遊ぶ」を、一千年史は、中国の南京と解している。けれどもこれは奈良のことであり、１５，６世紀、奈良の旧仏教が大いに復興し、華厳や三論、倶舎等の教学が盛んになって、多くの学僧がこれを学ぶ為に奈良の旧都に集ったのである。日秀もここでこれらのことを学ぶ為に南京に遊んだのである。又一千年史は、護国寺は古義真言宗であるのに、法式が多く新義派に法っているのも智積院の日秀の影響であろうといっているが、護国寺は明治まで新義派であり、現在は古義派であることを現住の沖縄仏教史で述べている。続日本高僧伝中の日秀は、１３才頃から刻苦して学び、４０才頃は南都に学び、醍醐寺の源雅大僧正から重んぜられていて、学僧として終始し、天正５年（１５７７）１２月に８３才で入寂したので、沖縄で活躍した日秀の行侶的色彩の強いのとは大いに異なるところがあるのである。

(D) 三国名勝図会の日秀伝

三国名勝図会は、五代秀堯、橋口兼柄らが薩摩の藩命をうけて、天保１４年に編纂されたもので、薩、隅、日の三国にわたって、山水、神社、仏寺等を図版入りで述べたもので考証精密といわれ、薩摩の歴史・地理の研究に重要な資料となっている。これによれば、日秀は字は照海、加州太守某の一子であるが年１９の時、人を殺し、１５２１年（大永元年）出家して高野山に入った。「是に於て発心、勇猛にして修行精進す。終に密法の奥旨を受け両部の源底を極む。更に願心を起して、観音所住の補陀浄土に至らんと欲し、一扁舟を求め海上に浮び、手に香爐を捧げ、唯風波に任せて去り南海に流れ至る。其の海磁石多く、海底の鉄釘為に脱す。時に鰒魚聚て釘孔を塞ぐ。」図会は、ここに註をつけ、この南海の海磁石多きところは、浙江省の東洋中にあり、そこの補陀落山に観音像ありて神

異赫然たりといい、日秀はそこに行き、日域にかえらんとして琉球に着いたとし、これは元亀天正の間としている。日秀は琉球に３年間滞留したが、国王以下の帰依をうけ、多くの奇瑞を示して薩摩に渡った。ここで坊津の一乗院を修し、三重の宝塔を建て、又仏像を手刻し、太守の求に応じて正八幡宮の新建に努力した。天正５年９月２４日７５才で入寂した。南聘紀考の日秀と、名勝図会の日秀で、出身地を一は上野とし、一は加州太守の子としている。又入寂の年を、一は天正３年とし、一は天正５年として異なる点はあるが、共通の資料によっていると考えられる。続日本高僧伝の日秀は、甚だしく学侶的であるのに対し、この二書の日秀は、行動的、行者的な色が濃厚である。これは続日本高僧伝の日秀と、この二書の日秀は別人であり、二書は同一人の日秀のことを述べているからである。

（E）琉球の史料に現われた日秀

⑴　指歸碑の成立

往昔の世、真和志の松川邑の指歸の地には、妖径が多く、行客を悩したので、夜が更けるとここを通る人がいなかった。正徳年間に日本僧日秀上人が波に随って来り、この地で経を念じて碑を立てたので、それから妖径が出なくなった。この碑面は後に磨滅して読むことが出なくなり、不可解なことを「松川の碑文」と言うようになったという。碑には梵字一字が刻されていたといわれる。南島風土記では「按ずるに、この地四方交会の衝に当っている為に、日秀上人の発願によって道祖神を勧請したものであろう」と記している。球陽では尚真４３年の条に附記し、正徳年間のこととしている。

⑵　１５２３年（尚真４６）嘉靖壬午、日域の比丘日秀上人、自ら弥陀、薬師、観音の三像を作り、護国寺に奉安した。（球陽）

⑶　１５２５年（尚真４８）

首里と浦添との間は一高嶺があり、松樹が茂り人烟遠く、この地にも妖径が多く、屢屢行路の人を悩ました。日秀は金剛経を小石に写してこの嶺に埋め、碑石を建てたので、以後妖径は出なくなった。現在も金剛嶺と刻した石碑が立ち、この地を経塚ともよんでいる。

⑷　夷堂を那覇に創建

「嘉靖年間、日秀上人、此の堂を創建し、夷殿を其の中に奉安す。夷三郎殿は、乃ち日本の伊弉諾、伊弉冊の尊の子なり。始め生るるの時四体全からず、状蛭兒に似たり。三才に至るも曽て徒歩せず、父母之を名づけて蛭兒と曰う。小舟に装載して碧海に流去し、即ち竜宮に至る。茬苒の間、７，８才に及びて身体已に全し。是によりて郷念日に起り、以て禁止し難し。一日帰らんと欲するの意を以て竜王に告ぐ。竜王曰く、今汝の貌已に全し。吾、汝の帰郷を許さん。須らく漁舟及び納税並びに商賈の事を管すべし。已に別るるの時に臨み、竜王宝物を他に贈る。而して鱸魚に駕して帰り来る。後世の人、尊びて市神と為し、必ず堂を市場に建て、以て崇信を為す」。として宝前に小鉄を懸ける由来まで記している。これは古く親見世の門前、戦前の山形屋の前にあったという。往来の頻繁な場所にあったので、本土よりの商人等が集居し、市場の神、商売の神として、それらの人々から尊信されていたのであろう。

⑸　地蔵の建立

日秀は、那覇市東西の境と、湧田の地に、自ら六体の地蔵を刻して石塔内に奉安した。六角の石厨子内に地蔵木像が安置されていて、その石厨子には、那覇では「一紙半銭助成の輩は、現世安穏、後世善所、嘉靖１８年巳亥２月１２日啓白」と書し、湧田では、「欽奉……六道能化、地蔵菩薩……現世安穏、後世善所、大明嘉靖１８年己亥三春晦日敬白」と書いてあったという。

⑹　金峰山補陀落観音寺

この寺は金武村にあり、弥陀、薬師、正観音の日秀作三尊を大権現として祀ってある。その縁起について、由来記は次のように記している。

「封尚清聖主御宇、嘉靖年中、日域比丘日秀上人、修行三密、終而欲趣補陀落山、随五黙般若、無前期到彼郡中富花津。上人自安心、歎白、誠知為補陀落山。又行何所、求之耶。留錫安住。幸哉、此地靈也。向比方(北)者似蓬来、有富登嶽。衆峰羅立、似兒孫。前有大湖、名池原。日洗塵垢、浮般若船。松樹竹瑪月、照三転四徳圃、実相実有春花、開幽窓。自性本有、造化無不現。峒

窟無窮。按、天有一門。不所及人力。靈跡不可挙数。靈現挙不可説。大慈呼有應。此洞者、竜宮千萬里。誰知根源哉。上人爰刻彼三尊、建宮、奉崇権現正体也。」

上の文で、洞窟が海に通じ、更に竜宮に到るとして、ここに権現を祀ることは、琉球固有信仰にふれる重要な意味をもつと考えられるが、日秀の行業が庶民信仰に大きな影響を与えた根本の思想のように思われる。

(F) 日秀上人の実像

続日本高僧伝の日秀は、不惑の年に南京に遊学し、三国名勝図会や南聘紀考の日秀は、琉球或は薩摩で活動している。又高僧伝で、密教の学僧として人々に重んぜられ、源雅大僧正に蘊奥を授けられていた６０才の頃は、名勝図会、紀考の日秀は、薩摩で領主の信頼を得て活動している。従って両僧は全く別人であり、名勝図会や南聘紀考に記された日秀が琉球史上の日秀であることは明らかである。日秀が琉球と中国、本土とを往来したように考えることも史料の拡大解釈である。日秀の琉球渡来の年について、由来記は、嘉靖中という。嘉靖は１５２２年から１５６６年にわたり、尚真から尚清を経て尚元の１１年に至る４５年間である。名勝図会は、永禄元亀の間とする。１５５８から１５７２年に及び、尚元３年から１７年迄である。又、琉球で指歸碑を建てたのは正徳年間（１５０６－１５２１）としている。これが琉球史上にあらわれる日秀の教化の始である。名勝図会によれば、日秀の生れたのは、１５０３年となる。１９才で人を殺し、高野山に入ったのは１５２１年ということになる。ここで何年間修行したかについては明らかではないが、琉球渡来は、その以後でなければならない。護国寺に、開聞山正1位権現を日秀が勧請したとされ、『嘉靖２年癸未、日秀上人が水土の恩を報ぜんが為に』と記されていることは、琉球渡来の年代に手がかりを与えるものではなかろうか。つまり日秀は、先ず薩摩に入り、ここを経て入琉したことを示すものであり、弥陀、薬師、観音三像を手刻して護国寺に奉安したのもこの年である。南聘紀考には、「既に６０余州を巡り遠航して」金武の富藏河に来たとし、これが通説となっているが、実際は、本土往来の琉球船か或は本土商人の船によって

薩摩につきここを経て那覇の港についたと考えられる。それが嘉靖２年１５２３年であったのである。伝承では波上の巌屈の中で修行したといい、又、日秀の来島する前に「国王は靈夢により、生身の仏の来ることを予知し、巫女が俄に狂して靈訓を述べたが、国王の夢と同様であった。果して那覇の海上に一僧無櫓の扁舟に乗じてきた」と名勝図会は伝えている。護国寺の地蔵像について、嘉靖年中、薩州川内の郡、大平寺の本尊が、この地に縁があり、波上に飛来したという説話を由来記は伝えている。日秀は波上の地に滞留した後、北上して金武に到ったものであろう。観音寺縁起に「上人自ら心を安んじ、歎じて曰く、誠に補陀落山たるを知る。又何れの所に行きて之を求めんや」と記しているのは、那覇から北方へ靈地を求めて行ったその末に見出した靈地が、金武の洞窟のある地であったことを示している。

日秀は那覇の護国寺と、金武の観音寺を二拠点として　その間を往来して宗教活動を行ったのである。指帰碑や経塚を建立することによって妖径を斥けて、仏教の咒術性が固有信仰に勝るものであることを庶民に教え、権現信仰を通して固有信仰との一致を説き、地蔵や夷堂又は仏寺を建立することによって、庶民を仏教に近づけて、庶民信仰に大きな影響を与えたことと思われる。日秀の琉球滞留は２０余年に及ぶと考えられるが、名勝図会は次のように記している。「遍く徳化を布き、屢神異をさらわす。風雨時に随い、五穀善く実る。国人称して神僧とし、上人は王公大夫より、下は凡庶鄙賤に至り上人を敬すること生仏の如し。…さて、上人は日来の念願に皇国に帰り、破壊の仏閣伽藍を修建せんと欲す。是に於て其の志を国王に告げ、舟に乗じて皇国に帰る。国王懇留すれどもきかず、国王許多の財貨を贈りて是を謝す…』この年が名勝図会の推定するように天文１４年１５４４年頃であろう。

(G) 薩摩に於ける日秀と入定

薩摩に於ては、島津氏の信任を得、一乗院を修復し、三重の宝塔を建て、多くの仏像を手刻し、国分正八幡宮の新建に努力したこと、その他多くの事蹟を残したことは坊之津町史にも詳細に述べている。天正3年（１５７５）１２月8日[8]

に入定し、天正5年9月24日、75才で入寂した。南浦文之に「日秀上人33回忌の法筵に呈する詩」がある。それによれば、天正乙亥、仏成道の日、世縁未だ盡きざるに、深く禅定に入る。其の意、世人の其の生を欲して其の惑を解せざる者を戒しむるに在り、其の苟難の行、人の得て跂及すべき者に非ず」

東西到處創名藍　　多少昏迷要指南
自出凡塵入寂定　　年光三十又加三

結　び

現在の護国寺の寺域には、1430年に柴山によって大安禅寺が建てられていた。これは柴山一行が、福建から琉球に安穏に航海往来出来たのは、神仏の加護によるものとして、その報恩の為であった。1456年には尚泰久王はここに巨鐘が寄捨された。けれども、理由は不明であるが、約百年後には大安禅寺は廃絶に帰した。その後1523年には、日秀上人が来島して、弥陀、薬師、観音の三尊像を手刻して三光院に奉安し、開聞権現を勤請し、波上における護国寺の開創者となった。尚、金武にも観音寺を建立し、両寺を拠点として琉球に宗教活動を展開して多くの遺蹟を残した。20年余滞留の後、薩摩に渡り、ここに30年余留まって大きな足跡をのこし、天正3年73才で入定した。続日本高僧伝に日秀伝があるが、これは根来智積院に住み、新義真言宗[9]に属する。琉球に来島した日秀はその伝が南聘紀考や三国名勝図会にみえる。これは高野山に修行したとされるので[10]、古義真言宗に属するであろう。一は学侶として名をなし、一は行者的で、民衆教化に大きな足跡をのこしていて全く別人である。

註

(1)　坊之津郷土誌上　30～62頁

(2)　南島風土記　229～230頁

(3)　鐘銘　琉球国由来記　231頁

⑷　三国名勝図会　鹿児島県史第二巻，鹿児島の歴史　156頁

⑸　日秀　仏教宗派辞典

⑹　南聘紀考　鹿児島県史第二巻　鹿児島の歴史

⑺　沖縄一千年史には続東国高僧伝としているが、続日本高僧伝162頁である。

⑻　入定、三光院の東南、巖上の平地に一向四方の小室をつくり、中に石畳をしき、四壁を塗りこめて東方の壁一ケ所に二寸の窓をあけ、暁の明星が見えるようにして那伽定という行に入った。（坊之津郷土誌上　49頁）

那伽定（ながじょう）とは、「身を龍に変じて深淵に定止するを那伽定という。長寿を保て弥勒の出世に逢はん為に願力を以て那伽定に入ること」と説明されている。

(9,10) 古義真言宗と新義真言宗

1288年頼瑜等が、高野山の大伝法院、密嚴院を根来に移し。覺鑁を祖として加持身説法の義を晶え、高野山の本地身説法の義と対立した、以後前者を新義派とし、後者を古義派といった。